

尼子家復興戦における佐陀江と満願寺城

山根 正明

はじめに

松江市西浜佐陀町の満願寺城跡は、杵築大社へ参籠するために出雲国を訪れた弘法大師が、四神相応の地であるとして開いたと伝える金亀山満願寺にその名を由来し、その背後の丘陵上に所在する。そして、18世紀初頭の成立の『雲陽誌』^(注1)に、近郷五六ヶ村を領した湯原弾正忠元綱が『出雲国風土記』にいう出島社（七釜大明神）の宮山をその要害にしたと記されて以来、湯原氏の本城であったとして定説化していた。^(注2)

これに対して長谷川博史氏は、湯原氏は尼子氏家臣の「富田衆」であって「出雲州衆」ではなく、春綱自身はその一庶流でしかないことを明らかにされ、春綱は毛利氏の「取誘」えた直轄城である満願寺城に「御番」として入城したものと指摘された。^(注3) 本稿は基本的にこの見解に立脚するものである。

満願寺城の構造については、『日本城郭体系14 鳥取・島根・山口』（昭和55年4月）に一部の測量図が掲載され、『出雲・隠岐の城館跡』（島根県教育委員会 平成10年3月 以下『出雲・隠岐』と略記）には主要部の略測図を掲載して報告されている。前者では、主要部に加え、島根県警察学校の校地が造成される際に、たまたま残された校地の北側部分（現寄宿舍棟の位置か）が図化されている。また、後者では、現満願寺本堂と庫裡さらに出島神社本殿の裏手にあたる主要部とその南西の宍道湖岸までが踏査されて図化されている。しかし、それより西側は略測図の中に「未調査」と記入されており、全容を調査したうえで検討することはできていない。

このたび、かつて行われた発掘調査の資料と成果が再検討したうえで本誌に報告（岡崎雄二郎「満願寺城跡の発掘調査について」）されるにあたり、文献史料と縄張り調査の二つの視角から佐陀江と佐陀地域及び満願寺城とその構造についてあらためて検討を加えることとしたい。

第1章では、満願寺城の築城にいたる背景を明らかにするために、第1節で尼子家復興戦における大橋川と宍道湖周辺の戦況を略述することとしたい。なお、境水道から中海での戦闘、あるいは熊野城の攻防戦や伯耆国内での尼子家復興戦などについては、関連する一部を除いて割愛する。続いて、第2節では、尼子家復興戦における佐陀江と佐陀地域の位置づけと役割を検討することとしたい。なおここで、雲芸攻防戦以前に登場するいわゆる「佐陀城」についても合わせて検討することとする。そのうえで、第3節において満願寺城の築城時期とそれにいたる背景を述べたい。

第2章では、満願寺城の構造について考察する。第1節ではその地取りについて検討するが、このたびの現地調査で新たに確認できた古江城についても合わせて考えることとしたい。第2節ではその縄張りと言請について、特に満願寺城を特徴づける横堀について出雲国内の類例とともに検討する。第3節では、この技法と湯原氏の関連を追跡するために、ほぼ同時期に築城された加賀地域の二城をとりあげて比較検討することとしたい。

なお、紙幅の制約により、史料と位置図・縄張り図等の掲載は行論の必要上最小限にとどめた。ご理解いただきたい。

第1章 佐陀江と満願寺城をめぐる戦況

第1節 尼子家復興戦と大橋川・宍道湖周辺

尼子勝久、山中鹿介らの永禄12年（1569）6月の島根郡千酌浦への上陸から始まった尼子家復興戦

は、城将天野隆重らの巧守に阻まれて富田城の奪回に失敗し、翌年2月の能義郡布部の戦いで毛利輝元らの増援部隊が尼子勢を破って富田城に入城したことにより、毛利方の優勢に一転した。4月には大原郡牛尾城、5月には島根郡森山城も陥落し、尼子方は本営とした島根郡新（真）山城（以下、真山城と記す）の他、意宇郡熊野城と出東郡高瀬城、神門郡土倉城などの拠点を残すだけになった。

元龜元年（1570）と推定される五月二十五日 小早川隆景書状^{（付表-1）}で、隆景は佐陀江に軍勢を派遣したことを伝え、この対抗措置によって真山城の尼子勢も容易には羽倉（和久羅）城（以下、和久羅と記す）を攻められないだろうが、引き続きその守備を嚴重にするよう野村士悦に命じている。^{（注4）}（元龜元年）六月八日 吉川元春書状^{（付表-2）}では、和久羅城を整備したこと、それにより尼子方の攻撃を撃退したこと、勝久近臣のおもだった者が毛利方に降伏してきていることなどを伝えている。堀立直正宛のこの書状では、元春は佐陀にも「一城取付相抱」えたと書き送っているが、この意味は佐陀江とともに第2節で検討したい。

そもそも和久羅城（標高261m）は、これ以前の雲芸攻防戦の際、毛利元就が、まず荒隈崎に陣を敷いて本営とし、その日のうちに和久羅山を奪取して築城し、その後、中海の大根島に乗り出して富田城と島根半島、特に島根郡における尼子方の拠点である白鹿城との連絡を遮断せよと命じたほどの要地であった。（付図Ⅰ参照）つまり和久羅山は、大橋川北岸のほぼ中央部にあたり、宍道湖と中海を結ぶ水上交通路を制圧できる位置を占めているからである。したがって和久羅城はいわゆる広義の海城^{（注5）}で、用いられることのなくなった荒隈城と異なり、尼子家復興戦においてもその重要性は変わらなかった。むしろ、真山城（標高256m）の南東約5.5kmに位置してその向城の役割も果たしていたから、重要度はいや増したと言えよう。その和久羅城を真山城の尼子勢が攻撃するのを牽制する為に、毛利方が佐陀江に軍勢を派遣したのは、尼子方が船を重用し、その軍勢を水上移動させる船戦を挑んだからである。

前述のように、永禄13年2月の能義郡布部の戦いでの敗北以降、劣勢となった尼子方は、船で兵員を毛利方の思わぬ場所に移動させ、奇襲をかけることで劣勢を挽回しようとした。また、数少ない尼子方の拠点である米原綱寛の拠る高瀬城との連絡も、宍道湖上を船によって行われたのであろう。したがって、尼子方にとって、大橋川から宍道湖という水面の広がり、尼子家復興戦を遂行するうえでぜひとも確保しなければならない連絡路だったのである。実は毛利方にとっても同様な意味を持つが、この点は後述することとしたい。

尼子方では、前年の永禄12年6月に本営を真山城に移すと、直ちに末次城を占拠している。^{（注6）}この城は、後に松江城が築かれた宇賀丘陵の先端（標高28m）に位置する。したがって、地形の要害性という視点からは選択がためられるような地勢に地取りしていた。さらに「末次土居」と記されているとおり、当初は低丘陵の上に営まれた居館程度の施設だったのであろう。しかし、大橋川中央部の両岸が大きく湾入して内湖（松江潟の内）を形成していた当時は、末次城は大橋川の咽喉部を押さえるとともに、東方約5kmに位置する毛利方の和久羅城と対峙する重要な海城であった。

そのため毛利方では、真山城攻略の前哨戦として末次城への圧迫を強めたようである。翌元龜元年5月10日には、尼子方の番将の大野高直らを降伏させてこの城を接收し^{（注7）}、野村士悦を在番させている。^{（注8）}さらに、同年8月には杵築から平田を経由して百俵の置兵糧を末次城に送り込んで増強しているのである。^{（注9）}

おそらくこの置兵糧は、これ以前の5月に温泉津から海路杵築に送られた兵糧米^{（注10）}であろう。つまり、毛利方では温泉津→[日本海]→杵築→[陸路か]→平田→[宍道湖]→末次という、水運による兵糧移送ルートが成立していたとみてよい。そしてこの結果、宍道湖西北岸の平田が兵員・物資の中継基地として重要度を増してきたのであるが、一方でこのルートは、前述した尼子方の真山城→[大橋

川・宍道湖]→高瀬城という水上連絡路とほぼ重なり合うのである。したがって、宍道湖西南岸の高瀬城に拠る尼子勢が、執拗に平田とその背後の平田（手崎）城を攻撃したことが知られている。^(注11)

第2節 尼子家復興戦における佐陀江・佐陀地域と「佐陀城」

第1節では触れるにとどめたが、ここでは佐陀江と佐陀地域について検討したい。「佐陀」と呼ばれる地域は宍道湖岸から日本海岸までつながっている。（付図Ⅰ参照）まず、宍道湖北岸に浜佐陀があり、佐陀江はここに含まれる。浜佐陀の北に下佐陀・上佐陀といわゆる佐陀低地が続き、佐太社の鎮座する佐陀宮内をへて低地が西方に方向を変えて続くのが佐陀本郷である。この西側に江角浦・古浦と続くが、二つの浦は恵積郷を吸収して佐陀荘の港の役割を果たしていたのであろう。

つまりこの地域一帯は、中世初期に佐太社とその周辺が安楽寿院に寄進され、佐陀荘（社）として成立したものである。したがって、その中心は佐太社の周辺つまり佐陀宮内とみられ、居館跡を示す「土井垣」や、「市場」「七日市」などの市庭の存在を伝える地名も残されている。

佐陀江は、康治2年（1143）8月19日の太政官牒案に、その安楽寿院領佐陀社の南限として「佐陀江口御分戸」と見えるのが史料上の初見である。^(注12) 佐陀江口とは佐陀江の出入り口の意味ととれ、現佐陀川の河口部付近を指しているのであろう。時代は下るが、前述の『雲陽誌』は、浜佐田村の江尻川に土橋があり、その橋長を十間（約19m）と記している。^(注13) 江尻川とは佐陀江の川尻の意味であろうから、重ね合わせて考えると、佐陀江とは宍道湖の北岸に形成された内湖（潟湖）を指すとみてよからう。

佐陀江の痕跡は、18世紀末に宍道湖の洪水調節の為に開削された現佐陀川を挟んで、東潟の内と西潟の内という二つの沼地として今も残っている。『出雲国風土記』には「佐太水海」として記載され、周囲は7里（3.7km）、宍道湖に通ずる水口は長さが百五十歩（267m）、幅は十歩（17.8m）とある。^(注14) 『雲陽誌』には「入海 浜佐田の潟の内 東西十二町 南北十町」と記載されている。これは周囲3.5km弱となるから、古代・中世を通じて佐陀江の湖水面の減少つまり干陸化は進んでいないと言えよう。また、『雲陽誌』にいう江尻川の橋長十間（約19m）も『出雲国風土記』の記す川幅とさして変わらない。したがって、戦国期にも佐陀江への船での出入りと船による佐陀江の中の航行は十分可能だったはずである。

第1節で示した野村士悦宛の5月25日付の書状で、小早川隆景が、佐陀江に軍勢を派遣したから真山城の尼子勢も簡単には和久羅城を攻められないだろうという見通しを述べたのは、次の二つの意味からと推測される。その一つは、5月10日に尼子方に属していた末次城を攻略したので、宍道湖から大橋川をへて和久羅城に向かおうとする尼子勢を、まず佐陀江から船で迎え撃ち、さらには末次城からも出撃することで撃退できる態勢が整ったからであろう。

いま一つは、前提として佐陀江そのものの制海権を掌握できると判断したからであろう。この推定を裏付けるのが（元亀元年）八月十九日 小早川隆景書状写^(付表-3)である。ここで隆景は、井上源右衛門尉を佐陀江に派遣して、圓福寺の苅田を行わせるよう栗谷元種に命じている。つまり、船で佐陀江に入り、上陸して下佐陀・上佐陀を経由して圓福寺に侵入させようとしているのである。佐陀江が、毛利勢にとって安全に航行できる湖水面となっているから可能となった移動方法なのである。

圓福寺とは島根郡講武村のことで、江戸初期に講武村と改称され、その後上講武村と南・北講武村にさらに分割された。条里地割に残る古くからの水田地帯である。小早川隆景が講武平野の苅田を命じたのは、言うまでもなくこの地域が敵地だったからである。もともと圓福寺は、5月10日に毛利方に降った末次城の番将の大野高直の所領であった。^(注15) したがって、尼子方としては、敵方にまわった者の所領を直ちに接収したことであろう。

確かに、真山城から尾根伝いに北に向かうと鳥ノ子山（標高243.3m）をへて上講武の七田に下るこ

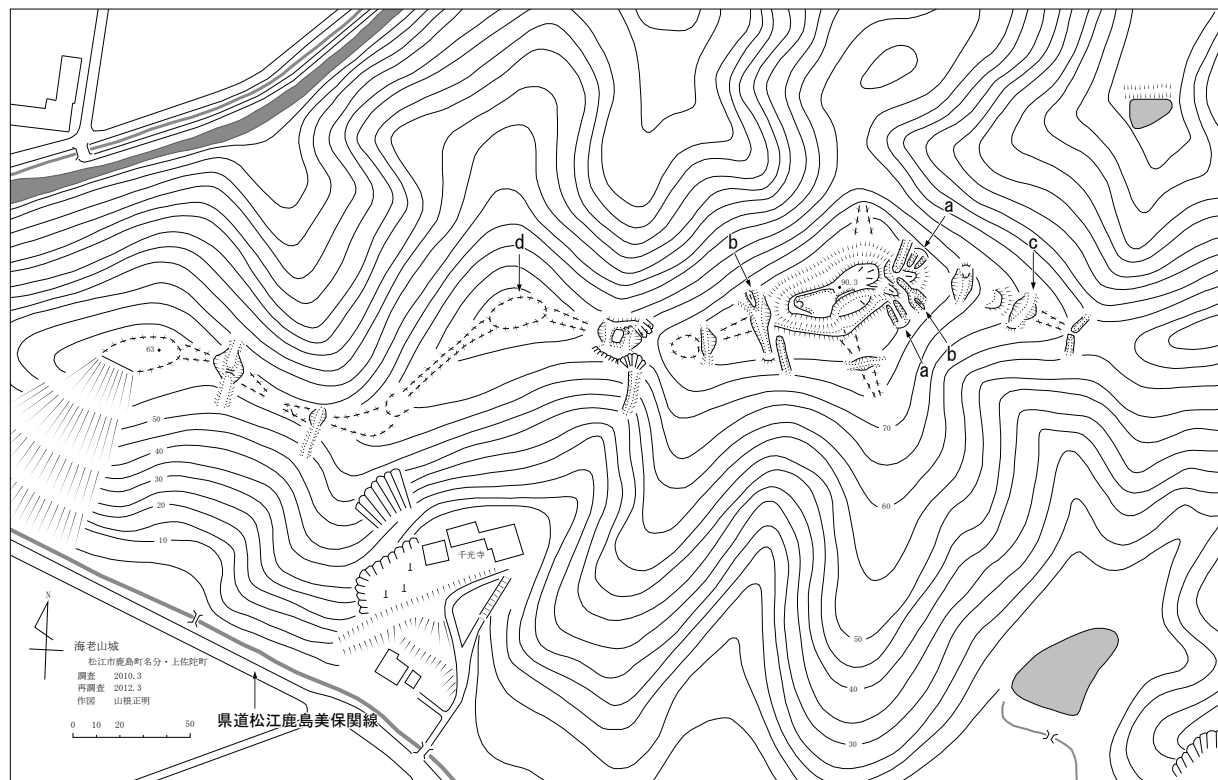
とができる。つまり圓福寺（講武）は真山城の北麓なのである。（付図Ⅰ参照）尼子勢は、この尾根づたいのルートによって上講武から講武平野一体を制圧していたのであろう。そしてさらには、上佐陀・下佐陀を経由して佐陀江に向かい、佐陀江から船で宍道湖・大橋川方面に出撃していたのであろう。

圓福寺（講武）からは、もう一つ海に通ずるルートがある。それは名分から佐陀本郷・武代をへて島根郡江角浦か秋鹿郡古浦に至り、日本海へ乗り出すルートである。ただ、島根半島沿いの日本海は、元亀元年の夏以前にすでに毛利勢によって制圧されていた。真山城の尼子勝久らは、これに対抗して、隠岐の尼子方と連絡を取りつつその分断を図ったようである。この舞台となったのが両者を最短距離で結ぶ加賀地域であった。

（元亀元年）十月廿八日 毛利元就・同輝元連署書状写（付表-7）によると、10月24日に児玉就英が加賀浦において尼子方の船を攻撃し、積んでいた兵糧米などを焼き捨てるという軍功をあげている。就英は、温泉津で船を仕立てて10月8日に出航し（注16）、16日に宇龍浦から加賀浦に到着したばかりであった。（付表-4・-5）そして、加賀浦での戦闘の翌日の25日には境水道を押さえる島根郡森山城に着岸している。（注17）

このように、島根半島の浦々をへて境水道から中海に入り、大橋川をへて宍道湖へという水上連絡路が形成されていたのであるが、毛利方では要所要所に陣城を構えて尼子方の攻勢に備えようとした。前述の加賀にも築城を命じているので、第2章で検討することとしたい。

まず、佐陀に築城されたという毛利方の陣城について検討したい。佐陀低地に面する山城遺構としては、薦津殿山城跡・高柳城跡・海老山城跡・蘆（呂）山城跡・大勝間山城跡・池平山城跡等が確認されている。（付図Ⅰ参照）これら諸城のうち、縄張りが巧妙で普請がていねいなのは海老山城（標高90.3 m）である。（付図Ⅱ参照）佐陀江から佐陀宮内あるいは圓福寺（講武）に向かおうとすると、佐陀低



付図Ⅱ 海老山城縄張り図

地が狭まって北進を阻むかのように立ちはだかる東西の尾根筋と対面することになる。西側のそれは麓に佐太太社の鎮座する稜線で、東側の尾根筋の先端に地取りしているのが海老山城である。

海老山城は、尾根筋の各所に土橋を伴う堀切を入れて切断し、土塁を巡らせた主郭には連続堅堀（付図Ⅱ-a）やY字形に分岐する堀切（付図Ⅱ-b）も認められる。主郭より東側の普請がていねいで、底幅約3m深さ約8mという大規模で急傾斜の堀切（付図Ⅱ-c）などで切断している。西側の尾根筋にも鞍部を利用して堀切が掘られているが、堀切と堀切の間に残された突起部（付図Ⅱ-d）は曲輪として造成せず、ほぼ自然地形のまま放置されている。つまり東側の尾根筋伝いの敵襲を意識した縄張りとなっている。この東側の尾根筋こそが鳥ノ子山から続く稜線なのであり、海老山城は真山城の尼子勢の来襲に備えた山城であることは明らかである。

大勝間山城については、（元亀元年）九月五日 毛利輝元・小早川隆景連署書状写（注18）に「末次・勝間両城取付之、并羽倉山三ヶ所二人数籠置、敵城差詰候」として登場する。この場合の敵城が真山城をさすことは明かで、大勝間山城は末次城、和久羅城と並ぶ重要性をもって真山城包囲網の一翼を担っていたことが知られる。

史料性は劣るが『雲陽軍実記』に関連記事（注19）がある。毛利勢の立て籠もる同城に尼子方の三刀屋蔵人らが攻めかかったが、運悪く蔵人が鉄砲で打ち倒されたので、さらに増援して攻め落とそうとしたところ、加勢して後ろ巻きしようとした毛利勢との間で激戦となり、結局は毛利方の方が敗走してしまったというのである。

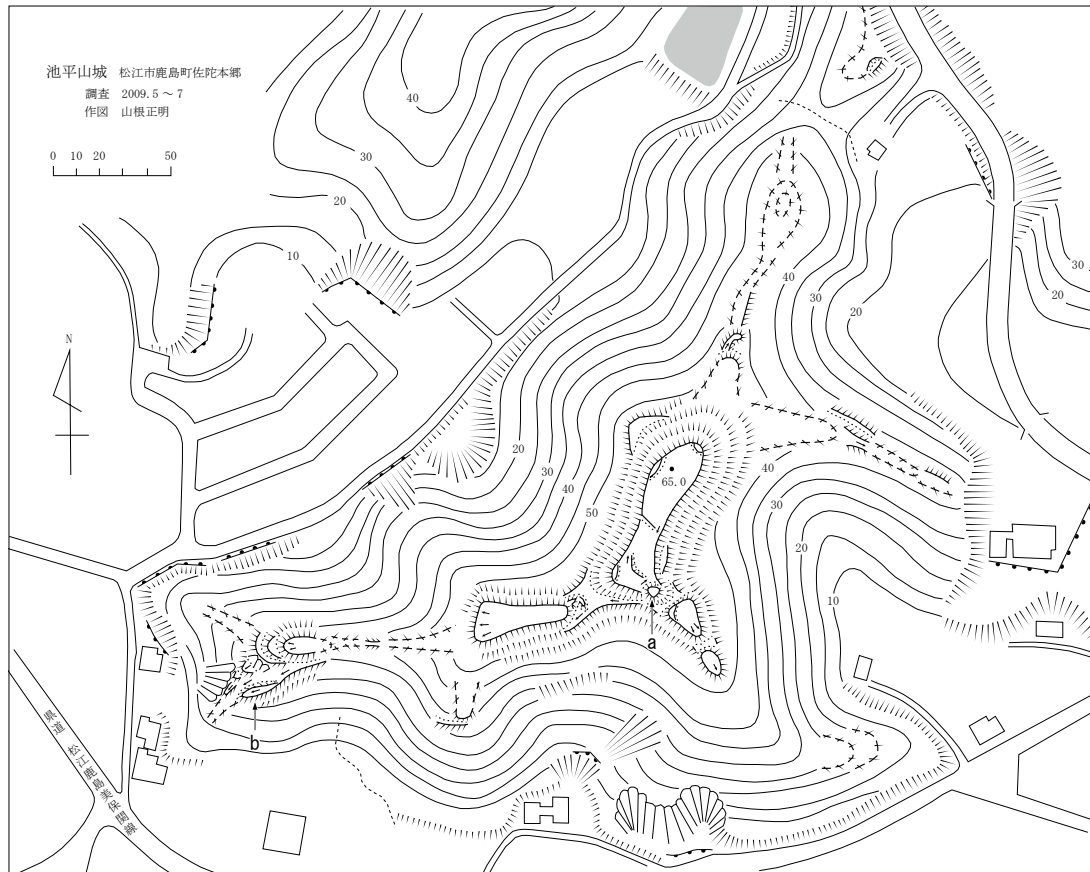
三刀屋蔵人は、雲芸攻防戦に敗れた尼子義久に従い、富田城から下城した約110人のうちの一人であり、「雲州勝間にて討死」との注記（注20）がされている武将である。また、三刀屋蔵人家忠の名前は、第1節で紹介した（元亀元年）六月八日 吉川元春書状写（付表-2）に、6月3日に攻め寄せた「敵数十人討取」ったなかの一人として記されている。余談ながら、尼子十勇士の一人上田早苗助もこの時に戦死している。したがって、6月8日の時点で元春が伝えた佐太に「取付相抱」た一城とは大勝間山城をさしている。ただ、信頼度に疑問の残る史料ではあるが『雲陽軍実記』に従うと、大勝間山城はいったん尼子方の手に落ちたことになろう。

大勝間山城跡は、県道の拡幅工事にともなってその一部が発掘調査されている。戦後の農地開発と中学校の校地造成などにより大半は消滅してしまったと考えられていたが、それでも、たき火跡や土師質土器、青磁・白磁・青花の破片、さらに鉛の弾丸（経1.2cm・重量8.13g）が出土している。（注21）

問題はなぜ大勝間山城が両軍争奪の激戦地になったかである。つまり、さして標高が高いわけでもなく（残された部分は県道からの比高が約18mしかない）、したがって精妙な縄張りや堅固な普請を施そうにもその余地の少ない小規模な山城であるにも関わらずである。それはやはり、真山城の背後に当たる講武平野が佐陀低地とつながる、その接点に位置するからであろう。

池平山城は、佐陀本郷の水田地帯に向けて北東方向から突きだした舌状丘陵の先端の突起部（標高65m）に立地する。（注22）（付図Ⅲ参照）北方に対する眺望は限定されるが、他の三方に対しては見晴らしがよく、特に江角浦や古浦の港を含めて沖合の日本海を広く見通すことが可能である。したがって、佐陀低地の陸路とその西端の港津、さらに日本海の海上交通をともに押さえる位置に地取りしているのである。普請は、堀切に面した櫓台（付図Ⅲ-a）を持つ不定形な主郭付近をのぞくと曲輪上面の削平が不十分で、全体に丸みを残している。また、周囲に伸びた尾根筋の処理もあいまいなままである。いかにも急遽造成された陣城という雰囲気山城である。

しかしながら、この池平山城も大勝間山城の築城とそう遠くない時期に築かれた毛利方の陣城ではあるまいか。推定の根拠の一つは、前述のような海陸の交通路におけるその位置である。第二は、一つ目と関連するが、講武平野から日本海への進出を遮断できる位置を占めていることである。宍道湖への進出を遮断する海老山城と対をなすと言ってよい。第三は、虎口に至る普請技法が和久羅城のそれに類似



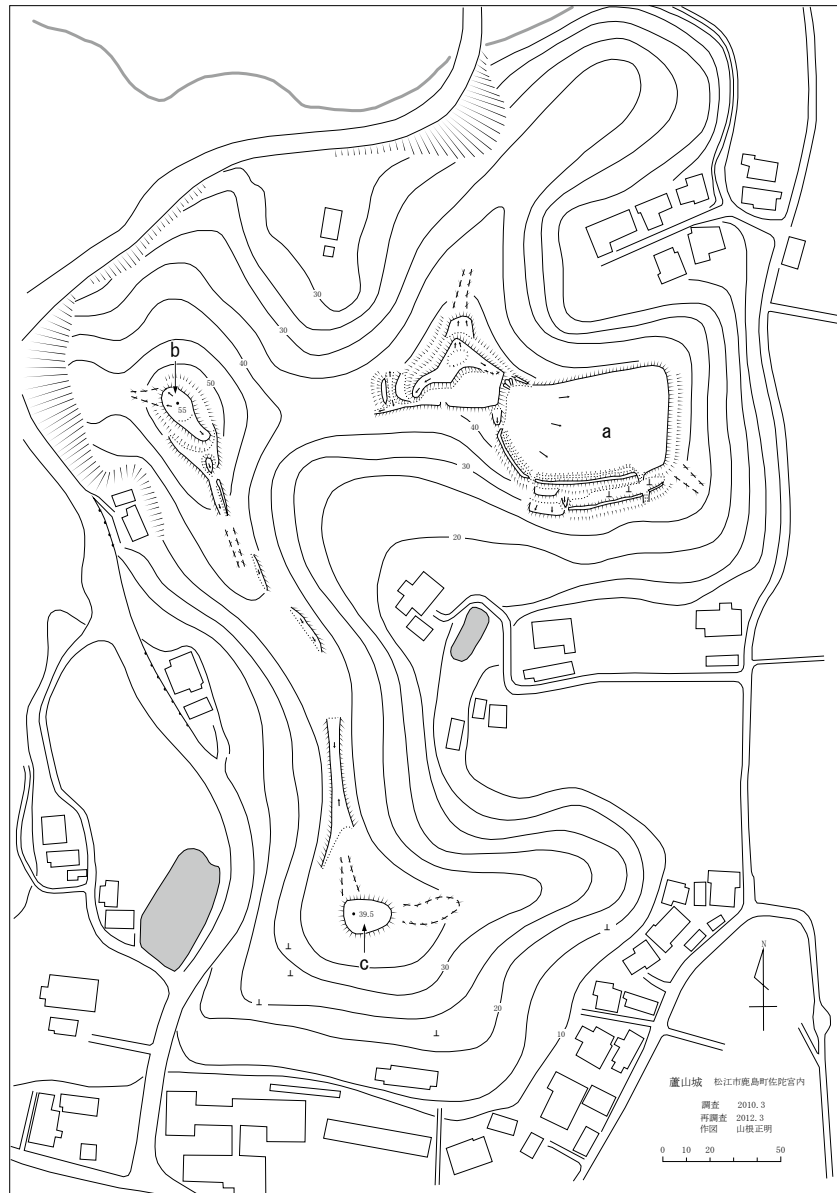
付図Ⅲ 池平山城縄張り図

している点である。池平山城の場合、山裾から斜面を伝って虎口に向かう登城道の南側を登り土塁（付図Ⅲ-b）で防御している。和久羅城では、西端の枡形虎口に至る斜面の登城道の両側を登り土塁で防御している。枡形虎口に至る斜面を二本の登り土塁で固めるという和久羅城の堅固な縄張りと言ったと準ずる池平山城は、毛利方がこの陣城に持たせた役割と寄せた期待の大きさを物語るものではあるまいか。

さて、この地域で検討しておかなくてはならない城がさらに二つある。その一は、観応元年八月北垣光昌軍忠状（注23）に記された「佐陀城」についてである。軍忠状によれば、北垣光昌は観応元年（1350）8月12日に、佐陀次郎左衛門尉・玖潭彦四郎・小堺次郎左衛門尉らとともに「佐陀城」に立て籠もり、翌13日に「佐陀城」から出撃して「白濁橋」の上で戦ったというのである。この「佐陀城」がどこなのかであるが、佐陀を名字とする佐陀次郎左衛門尉が加わっていることを考え合わせると、海老山城か蘆（呂）山城の可能性が高いと考える。もちろん両城とも、確認できる現状は後世の改変の痕である。

海老山城については前述したので省略する。蘆（呂）山城は西側にある鞍部を堀切で切断し、東側の佐陀低地に向かう舌状丘陵に地取りしている。（付図Ⅳ参照）堀切の直上の主郭と、一段下がった東西軸が約70mもある広大な曲輪（付図Ⅳ-a）とからなっている。現状からは蘆（呂）山城は、佐陀江と江角浦・古浦の間の佐陀低地を行き来する毛利方の兵員や物資のために、駐屯空間を大きく取った繋ぎの城（中継基地）とみられる。しかしながら、その西部の二つの突起部（付図Ⅳ-b・c）にも普請の痕がそれぞれに残されている。いずれも、曲輪上面の削平も切岸の削り落としもあいまいであるが、毛利方による最終的な普請以前に当城の果たした役割を彷彿させるものがある。

いまひとつ検討しておくべきは、『雲陽軍実記』が伝えるところの、塩冶興久が父の尼子経久と対立して天文元年（1532）に配下を立て籠もらせた（注24）という「佐陀城」についてである。同書によれば、



付図Ⅳ 蘆山城縄張り図

塩冶興久は「佐陀の江」に向城を構えようと自ら見分し、城地を定めて待ち受けさせたが、經久は湖上よりの兵船数百艘と「生馬」「比津原」からの軍勢で攻め立て、一時は興久方によって「中原」「国屋」まで後退させられたものの、ついに「佐陀城」を陥落させたという。「佐陀城」の落城を知った興久は、經久方の末次城を攻めたが、大敗して塩冶へ撤退したというのである。

この時の「佐陀城」については、佐陀江の東岸で浜佐陀との境界となる丘陵上に位置した薦津殿山城という伝承が残っている。^(注25) ゴルフ場に造成されて消滅したため検討の手がかりがないが、旧地形はいくつかのピークの点在する丘陵地であった。薦津の佐陀江に突き出した細長い丘陵の上には高柳城跡も残るし、同様なやせ尾根上に位置する満願寺城とする推定もある。^(注26) ただ、塩冶興久の反乱事件のなかで「佐陀城」での戦闘を記しているのが『雲陽軍実記』しかない現状では、その記事に即して推測するしかない。とすれば、『雲陽軍実記』の伝える「佐陀城」は、記された戦闘の経過、特にその地名配置（付図Ⅰ参照）から薦津の殿山城と考えるのが妥当であろう。

なお、薦津自体も「津」、いわゆる港津の存在を伝える地名であるが、薦津には「船津」という小字地名も残る。港津のあったことを伝える地名は、佐陀江からはやや距離のある下佐陀の「柳内津」「大

芦津」、上佐陀の「城津」があり、古志には「大舟津」「舟津」「先ノ津」が残されている。このように、佐陀江周辺とこれに流れこむ小河川にはいくつもの船着き場があったものと推定される。

第3節 満願寺城の築城

満願寺城が信頼できる史料で確認できるのは、元亀元年と推定される十月廿五日 毛利元就・同輝元連署書状写^(付表-6)からである。^(注27) ここで毛利元就と輝元は、尼子方が満願寺山に築城しようとしていること、これに対抗させるため神門郡神西城に駐屯している毛利勢が出陣することを知らせるとともに、配下の名井・木原・酒井・檜山・児玉・財満らの諸将にも出陣を求めている。

既に述べたように、元亀元年の5月以降、佐陀江を含む佐陀地域は毛利方によって制圧されていた。ところが10月になると、尼子勢が宍道湖から佐陀江への入り口を扼する満願寺山に築城するという事態が発生したのである。病を得た元就とその見舞いのために急遽帰国した輝元は安芸吉田にいたはずであり、出雲からの急報を受けて対抗策を指示したのが25日だから、尼子勢が満願寺山に取り付いて築城を開始したのは遅くとも10月初旬のことであろう。

おそらく、南東の和久羅城、南方の末次城、西方の大勝間山城からなる真山城包囲網のうちでもっとも突破しやすかったのが西方で、尼子勢は鳥ノ子山をへて圓福寺（講武）から佐陀宮内へ、そして佐陀江へと進出したのであろう。尼子方の攻勢は、さらに宍道湖へと進出して高瀬城に扼する米原綱寛らとの連絡路を確保するねらいがあったものと思われる。前述の佐陀低地の諸城、特に大勝間山城が尼子方によって奪取され、一気に佐陀江の出入り口を扼する満願寺山までが尼子勢によって制圧されたのであろう。

このような尼子方の攻勢は、元就重病という知らせがもたらされ、9月5日に輝元と小早川隆景らが帰国すべく出雲を離れた隙を突いた軍事行動であった。10月24日に毛利水軍の児玉就英が尼子勢と加賀浦で船戦を繰り広げたのも、尼子勝久らが隠岐の尼子方と連絡を取りながら反転攻勢に出たことを示している。

しかし、ほぼ一ヶ月後の（元亀元年）十一月二十日 毛利元就・輝元連署書状写^(付表-11)では、満願寺城もまもなく攻略できるという見通しが伝えられている。現地では、富田城からの毛利勢が宍道湖南岸の意宇郡日吉や大庭に到着する予定のもとに、児玉就英らが警固船を満願寺城にむけて進出させるよう命じられている。^(付表-12) 先の10月25日の書状と合わせて考えると、佐陀低地を南進して佐陀江へ、さらに宍道湖へと向かう尼子方の攻勢に対抗して、毛利方では出雲国の西端にあたり出雲攻略の中継基地というべき神西城と、毛利氏における山陰経営の中核である富田城に駐屯する軍勢をこぞって投入しようとしている。さらに、中海や大橋川に仮泊していたとみられる毛利水軍にも出動が命じられており、海陸両面からの大規模な反撃態勢が整えられていたのである。満願寺城は、このような両者角逐の焦点で築城されたと言えよう。そうしたなかで、11月22日の夜には、湯原春綱が佐陀江にあった尼子方の船三艘を奪取したと報告している。^(付表-13・14)

だが（元亀元年）十二月四日 毛利元就書状写^(付表-15)で元就は、児玉就英に対して、満願寺城をめぐる戦闘に決着がつけば、年内にいったん帰還して来春ふたたび出陣するよう伝えており、12月に入ると既に戦闘は山場を越している雰囲気を読み取れる。そして（元亀元年）十二月十二日 毛利輝元書状写^(付表-16)では、満願寺城と下葉崎^(注27)が落城したことを祝うとともに、残った拠点の真山城と高瀬城の平定に向けていっそうの尽力を末国元光に求めている。また、この攻撃に参陣できなかったことを悔しがる書状を口羽通良宛に送った武将^(付表-18)もいるから、毛利勢が満願寺城を落城させたのは元亀元年の12月4日以降12日までの間のことであろう。

ただ、これまで引用した史料には「満願寺」あるいは「満願寺山」と出ていて、満願寺〔城〕とは記

されていない。つまり、毛利方では満願寺〔城〕ととらえてはいなかったふしがある。だが、後述するように、「満願寺山」には広い範囲に曲輪が造成され駐屯空間が広く取られていたとみられるので、急造ながら毛利勢にとって大きな脅威となったことであろう。尼子方による満願寺山への普請については次章で検討するとして、毛利方が奪取してからの満願寺城に関する史料を見ておくこととしたい。

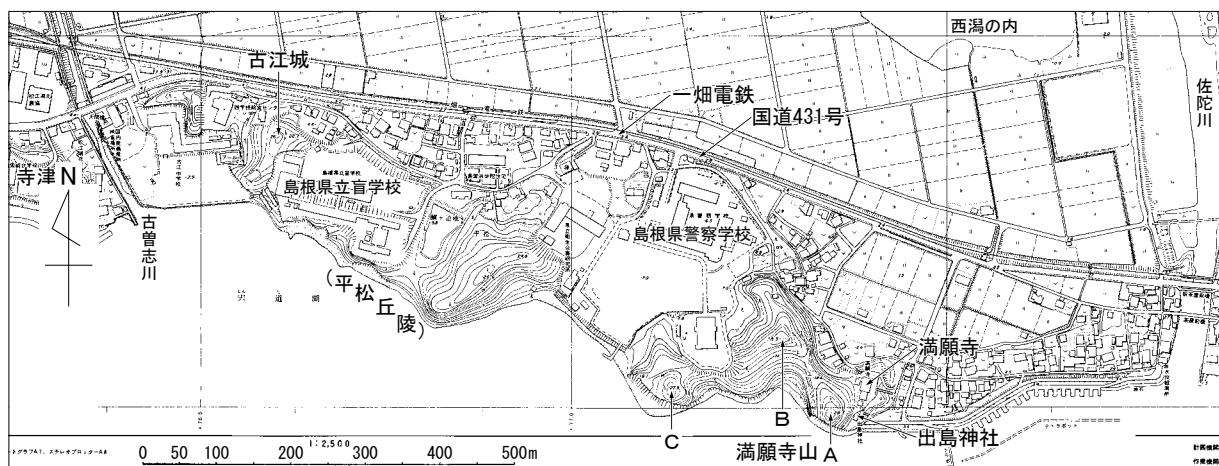
落城の直後と思われる（元亀元年）十二月十八日 毛利元就書状写（付表-17）では、末次城に在番している湯原春綱が「満願寺取誘付而御番之儀各申」、つまり修築して在番すると申し出たことが知られる。元亀2年になると、毛利元秋から「境目」の城に在番していることを慰労されたり（付表-30）、小早川隆景からの同様な書状（付表-31）ももらっているから、湯原春綱が満願寺城に在番していたのは明らかである。ただ、在番とか番将とよぶように通常数人で務めるから、湯原春綱は「境目」の城として重視された満願寺城の番将の一人だったと考えられる。

第2章 満願寺城の構造

第1節 満願寺城と古江城の地取り

満願寺城は、北西方向から宍道湖と佐陀江の間に岬のように突き出した低丘陵の東端（以後満願寺山とよぶ）に地取りしている。満願寺山は、中間に現佐陀川を挟んでさらに東方が荒隈城の築かれた丘陵地となる。北側の佐陀江方向は緩やかな傾斜地で、畑や住宅地、あるいは公共用地（国道・県警察学校）等として改変されている。南方の宍道湖側のほとんどは松江層が路頭した断崖となっている。

満願寺山にはほぼ同じ標高からなる三つの突起部がある。（付図V参照）東方の突起部（標高28.3m



付図V 満願山周辺要図
松江圏都市計画図3（平成5年修正）より

以後Aとよぶ）の東側の裾は満願寺と出島神社の境内地となり、西側は墓地となっている。墓地から続く中央の突起部（標高28.3m 以後Bとよぶ）はもっとも裾が広く、その周囲の斜面はほとんどが曲輪として造成されている。約150m離れた西方にも突起部（標高27.3m 以後Cとよぶ）があるが、曲輪としての造成は中心部分にとどまる。

満願寺山は県警察学校の校地に造成されてとぎれ、約100m離れて再び湖岸に沿った低丘陵（以後平松丘陵とよぶ）へとつづく。このとぎれた位置に、つまり県警察学校の校庭の南端の宍道湖岸に「古湊」という小字が残っている。現状では、校庭として平坦に造成された先端に、湖岸に沿ってわずかな幅で砂浜が続いている場所である。松江ヨット協会の艇庫が建てられていることがかつての景観を彷彿させるだけであるが、おそらく県警察学校の校庭が湖岸にせり出すように土盛りして造成される以前

平松丘陵は緩やかに西方に向かって続き、西半分ほどには県立盲学校の校地が丘陵を大きく削って造成されている。その丘陵の西端も、削り取られてかつて古江中学校と給食センターに造成されていたが、現状では松江イングリッシュガーデンの敷地となっている。この西側は現古曾志川の川口で、西方の寺津から続く丘陵はここでとぎれている。したがって、平松丘陵もあたかも細長い島のように横たわっているのである。

松江イングリッシュ・ガーデン

国道 431 号

鳥取県立盲学校

古江城 松江市西浜松町町

調査 2012.4
作図 山根正明

0 10 20 50

に沿った低丘陵は、その東端と西端に海城とよぶべき役割を果たした山城が築かれていたのである。

満願寺山で縄張りがもっとも巧妙で普請もていねいなのは、東側の突起部Aとその周辺で、この標高28.3mの地点こそが満願寺城の主郭である。(付図Ⅶ参照)ただ、ていねいに削平されているが不定形で、その東西と北側に配した腰郭も同様である。東側がやや緩やかであるが、西側と北側の切岸は急角度に削り落とされている。土塁は認められない。

さらに、このS字の頭の部分の北側にも横堀（付図Ⅶ-c）とみてよい普請の痕がある。北端は境内から墓地へ登る途中の斜面に開口している。南端は確認しようがないが、墓地の造成のためにとぎれてしまったようである。二本の横堀の中間（付図Ⅶ-d）は自然地形のままであり、掘りあげた土を盛って土塁とする意識は認められない。

(89)

う。ここでは、標高28.3m地点から北西方向と南西方向に伸びた尾根筋とその両側に曲輪を配している。

南東方向つまり満願寺城の主郭方向は墓地であるが、それが階段状になっているところをみると曲輪として造成された後に墓地に転用されたことが読みとれる。なお、突起部Bの南下方の宍道湖岸にはわずかな砂地が残されており（付図Ⅶ-e）、船の停泊場として利用されたと思われる。

突起部Bは全体に普請が粗放で、その周囲に旧地形に応じて不定型な曲輪群を造成している。なかでも北西方向に伸びた尾根筋は自然な丸みを残しながら下っていく。（付図Ⅶ-f）むしろその東西両側に造られた曲輪群の方が、曲輪上面の削平も切岸の削り落としもていねいで段差もある。

南西方向に伸びた尾根筋は、北西方向のそれよりも平滑な普請がされている。この南側、つまり宍道湖側の斜面に造られた4段の曲輪は、停泊場を守るためであろうが、さらにていねいな普請が施されている。しかし、上段の曲輪と下段のそれとの段差は大きく、相互の連結は意識されていないようである。

警察学校敷地のうち、拳銃射撃場や警察犬訓練場となって削られた部分（発掘調査区A 岡崎論文参照）にも曲輪が設けられていたし、北側の寄宿舎棟となった部分（発掘調査区B）にも造成の痕が認められる。したがって、その中間の警察学校敷地も城域に含まれると考えられるから、突起部Bは北方に広い駐屯空間をもっていたとみられる。

突起部Cには小規模な曲輪群が造られているが、上面の削平も切岸も突起部Bより粗放である。ただ西側から27.3m地点の最上段の曲輪に入るための虎口（付図Ⅶ-g）が設けられているのが目を引く。逆に突起部A・Bではともに明瞭な虎口は確認できない。

次に古江城の縄張りと言を普請を見よう。（付図Ⅵ参照）古江城は最高所の26.1m地点を主郭とし、自然地形に応じた縄張り曲輪が配されている。ただ、四方が学校敷地や民家などで削り取られているうえ、主郭の南端には遊具が設置されており、遺構の保存状態は良好ではない。残された部分から見ると、曲輪上面の削平は全体に不十分であるが、南西方向、つまり宍道湖側の腰曲輪（付図Ⅵ-a）は削平も切岸の削り落としもていねいな普請を施していると言える。

以上、満願寺山と平松丘陵で確認できる縄張りと言を普請は次のようにまとめられるであろう。突起部B・Cと古江城は、最高所を中心曲輪として、その周囲と派生する尾根筋に階段状に腰郭を配置するという縄張りである。したがって自然地形に応じた曲輪配置で、曲輪間の連絡や機能の分担という意識は認めがたい。普請の程度は概して粗放であるが、切岸の削り落としには注意が払われていて、その段差と急傾斜をもって防御の基本としていると言える。堀切りも堅堀もない。土塁も同様であるが、緩斜面を削りこんで曲輪を造成するにあたり、その縁を残して堅土塁とするという技法がそれぞれに一カ所ずつ（付図Ⅵ-b、付図Ⅶ-h・-i）認められる。

突起部Aも基本的には突起部B・Cや古江城と同様と言ってもよいが、横堀をめぐらして主郭の防御とするという点で縄張りにおいても普請においても大きく異なる。横堀の事例は、堀切・土塁などと比較して多くはない。島根県教育委員会の中近世城館跡分布調査事業によって、出雲国内で確認され調査のまとめとして紹介されているのは、平の城跡（安来市伯太町井尻）、諏訪城跡（雲南市大東町須賀）、三沢城跡（奥出雲町三沢）と満願寺城跡の四城である。（注29）三沢城をのぞいては、主郭あるいは主要な曲輪に接して横堀が築かれているが、直線を意識しているし二重に築いた例はない。ただ、諏訪城の横堀の場合、分岐して堅堀に続き、別に隣接して掘られた堅堀と対になって連続堅堀を構成している。これは満願寺城の突起部Aよりも優れた縄張りと言える。

これまでの検討から、さらに踏み込んで修築の経過を推測すれば、次のように言うことができよう。満願寺山には、まず第一期に、現状で確認できる突起部B・Cのような縄張りと言を普請がAを含めた三つの突起部に施され、一応の完成をみた。その後、第二期として突起部Aだけに横堀を伴う普請が施され

てさらに強化されたが、B・Cに対しては改修されることはなかった。平松丘陵の西端にも、満願寺山の第一期と同時期に普請が施された。この古江城についても、第二期に改修・強化されることはなかった、となろう。

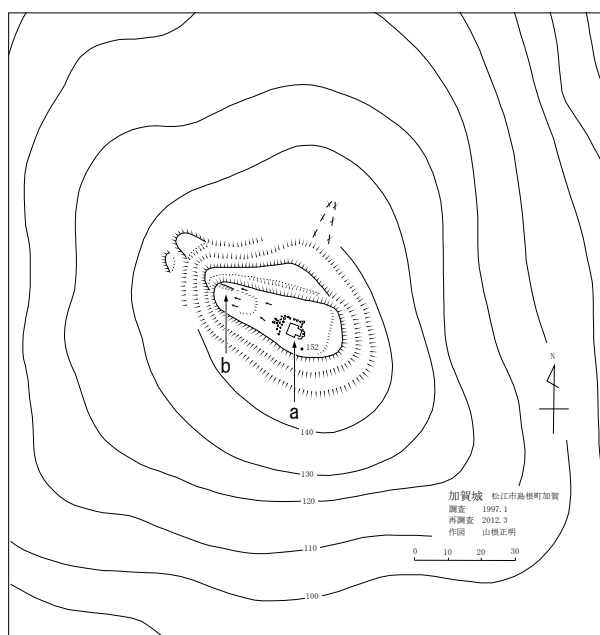
以上を、第1章第3節での検討の成果と重ね合わせてみたい。まず第一期の縄張りと言はれ、普請は尼子勢によるもので、元亀元年の10月初旬以降のことと考えられる。堀切や堅堀を伴わず、曲輪を重ねることと急傾斜の切岸をもって防御とするという縄張り観と普請技法は、熊野城などの在来の出雲国人の山城に見られるところである。そしてこの時期の、つまり第一期の満願寺城の中心は突起部Bであったと思われる。そこでは、ふたたび宍道湖上の制海権を獲得すべく、突起部AとBの中間下方の宍道湖岸に設けられた船溜まりと、突起部Cの西側の船溜まり（「古湊」付近か）の防御が重視されたであろう。

その後、12月4日以降12日までの間に満願寺城を奪取した毛利勢が改修・強化したのが突起部Aであった。反面、突起部B・Cや古江城に対しては大規模な改修を加えようとはしなかったと思われる。毛利方にとっては、尼子勢がふたたび講武平野から佐陀江へ突出し、宍道湖上の連絡路を脅かすことのないよう、その意味でいわゆる「境目」の城として重視したのであり、特に佐陀江の出入り口を扼する位置に重点的な普請を施したと推測されるのである。

なお、このような普請は当然湯原春綱らの満願寺城在番衆によって行われたであろう。（元亀二年）二月三日 吉川元春書状写（付表-19）で元春は、春綱に対して、真山城の尼子方の来襲に備えて山下の普請をしっかりとすべしと命じている。そのなかで元春は、特に「尾首之堀御掘せ」ることを強調している。満願寺城から古江城にかけての城域で、堀とよぶべきは突起部Aの二本の横堀（付図Ⅶ-a・c）の他にない。したがって、元春の言う「尾首之堀」とはこの横堀をさすと考えられるが、次節でさらに検討することとしたい。

第3節 加賀城・要害山城の築城とその構造

前章第2節でふれたように、真山城と隠岐の尼子方とを最短距離で結ぶのが加賀地域であった。そのために、同地に毛利方が築城を命じたのは元亀2年と推定される二月十三日 毛利輝元書状写（付表-20）が初見である。これ以降、3月（付表-21・-22）、4月（付表-24）、5月（付表-25・-26・-27・-28・-29）と、湯原春綱の在番と湯原氏による加賀城の普請を伝える史料が残されている。真山城が落城して尼子勝久らが隠岐に



付図Ⅷ 加賀城縄張り図

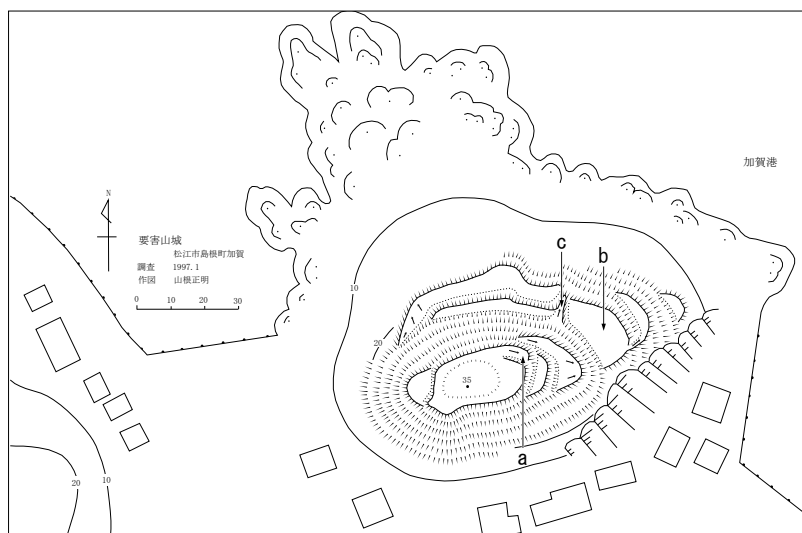
脱出した8月以降も、元亀3年5月（付表-32）、同4年3月（付表-34）と同様な状態が続いたことが知られる。

前章第3節で指摘したように、湯原春綱は、元亀元年12月以降、満願寺城の番将の一人であった。少なくとも翌年2月までは在番していたと思われるが、一方では同年2月から直線距離で約10kmも離れた加賀にも在番して城普請にあたったことになる。加賀の番将は他にもいたと思われる（付表-21）が、具体的に誰かは確認できない。

番将を複数と推定する根拠は、松江市島根町加賀には二ヶ所に山城遺構が確認されているからでもある。（付図Ⅰ参照）その一つが加賀城跡である。（付図Ⅷ参照）湾口から加賀港に入る船がまず目にするのが弥山（浜田山とも）で、加賀城は

その山頂（標高152m）に地取りしている。港から約1km離れた内陸に位置するものの、広義の海城とみてよい。主郭には地山の石を積んで基壇にして神社が祀られ（付図Ⅷ-a）ていて、そのために攪乱された可能性はあるものの、縄張りも普請も単純で粗放である。

もう一ヶ所の要害山城跡は加賀港に突き出した岩山の上（標高35m）に立地している。（付図Ⅸ参照）現状では埋め立られ



付図Ⅸ 要害山城縄張り図

て岸壁となっているが、要害山城跡の北西側には「蛸島」「権太島」という通称地名が残っており、その裾には港に面した小島や岩礁があったものと思われる。城跡そのものは「要害山」とよばれ、遺構名はこれに由来する。（注30）

要害山城跡の曲輪はいずれも海側に配置されており、まさしく海城そのものである。普請は地山の形状に規定されて不定型で、主郭上面も丸みを残したままである。ただ、その北東側の隅は傾斜して坂虎口（付図Ⅸ-a）となっており、主郭の東端からの横矢掛を意識した普請とみてよい。このような普請は加賀城の主郭（付図Ⅷ-b）にも認められるので、同じ番将による同様な縄張り観にたった普請と言えよう。なお、主郭の東側約7m下方の曲輪（付図Ⅸ-b）だけは平滑に削平されており、西側の隅に堅土塁（付図Ⅸ-c）が認められ、東側にはさらに下方の曲輪と連絡する通路が残る。

さて、先にも引用した加賀集落に残る通称地名によると、集落の西側には「土井屋敷」「土井小路」「土井の頭」があり、居館が営まれていたことを伝えている。（注31）加賀の集落は要害山城跡の足下に広がるから、この居館は要害山城との関連をまず想定すべきであろうが、筆者は加賀城を詰城とする領主の居館と考えたい。

というのも、加賀は蓮華王院領加賀荘の荘号由来の地だからである。加賀荘は、成立期には、加賀はもとより現松江市島根町大芦から鹿島町御津・南講武・北講武（いわゆる圓福寺）から、島根半島の脊梁を越えた西持田町・東持田町にまで広がる大荘園であった。鎌倉期には相模国からの西遷御家人土屋氏が地頭であった。（注32）いつ下向したかは明らかでないが、おそらく、地頭あるいはその代官が加賀港のかたわらに「土井屋敷」を営み、後に港と日本海を見通す背後の弥山山頂に普請を施したのが始まりでなかろうか。それが、尼子家復興戦時には真山城と隠岐との中間地点であることから、尼子方の水軍から加賀港を防衛するために要害山城が築かれ、その終息後も伯耆・因幡に向かう沖合の航路の安全を確保べく毛利方によって修築・強化が進められたのであろう。

問題はこの普請が誰によって行われたかである。既に述べたように、加賀地域の重要性から複数の番将が配置された可能性はあるが、おそらくそれは湯原春綱の主導によるものではあるまいか。つまり、加賀に在番を命じられた湯原春綱は、加賀城の虎口の一角には普請の手を加えたもののその程度にとどめ、加賀港により近い「要害山」を選んで築城し、それを重点的に強化したものと推定される。

このように推定するのは次の二点からである。まず、既に述べたように、加賀城と要害山城の縄張り観や普請技法に共通性が認められることである。さらに、毛利方では湯原春綱を加賀地域の番衆の筆

頭、普請の責任者ととらえていたことが読み取れるからである。

まず、(元亀二年)五月廿一日 毛利輝元書状写^(付表-27)によると、湯原春綱から加賀城の普請道具を支給するよう要請があり、早急に調達して送るとの回答が輝元から春綱に伝えられている。(元亀三年)五月廿一日 天野隆重書状写^(付表-33)では、尼子家復興戦の終息後も、「加賀要害縄結替切岸」のために近辺の村々に夫役を命じたことが春綱父子に伝えられている。また(元亀四年)五月四日 小早川隆景書状写^(付表-36)によると、春綱から「置兵糧玉薬百矢」の補給や普請の申請があり、隆景はいずれももつともなことで回答している。ただ、この書状には加賀城あるいは要害山城との文言はないが、約一ヶ月半前に湯原春綱が在番していたこと^(付表-34)は明らかだから、加賀地域の防衛のための軍需品や城普請と考えてよからう。

ひるがえって、湯原春綱の加賀地域における城普請と満願寺城の突起部Aの普請を比較すると、両者には技法的に大きな隔たりがあると言わざるをえない。したがって、突起部Aの縄張りと言普請を主導したのは出雲国外からの番将であり、その普請技法を用いて強化されたのが毛利期の満願寺城と言えよう。

おわりに

紙幅を費やしすぎたので簡単に以上述べてきたところを要約してむすびとしたい。尼子家復興戦時の佐陀江は、退勢にたった尼子方にとっては真山城から宍道湖・大橋川への出口に当たる要地であった。そのため、現佐陀川から現古曾志川までの間の宍道湖ぞいに島のようにつながった低丘陵(満願寺山から平松丘陵)上に、尼子方による普請が施された。このうちの東側が満願寺城で、途中普請の途切れる部分があって、西端には古江城が築かれた。尼子方はふたたび宍道湖の制海権を確保することを目的としており、船溜まりの防御を重視した海城としての築城であった。その時期は元亀元年10月初旬のことと推定され、毛利元就が重体に陥ったために輝元らが出雲を離れた間隙を突いた尼子方の反転攻勢の一環であった。

これに対して毛利方は、神西城と富田城の城兵と毛利水軍を動員してその奪回に努め、同年12月4日以降12日までの間にこれを攻略した。そして、満願寺山のうちの突起部Aに横堀をとまなう普請を重点的に施して強化した。毛利期における満願寺城は、佐陀江への出入り口を扼する役割を担った海城であった。

湯原春綱は満願寺城の番将の一人であった。春綱は加賀の在番もつとめ、加賀城の修築とともに要害山城の築城と維持にあたった。その普請技法は在来の出雲国人の山城遺構に見られるもので、特段先進的な技法を導入したとは認めがたい。したがって、文献史料からも縄張り調査の結果からも、湯原春綱を満願寺城の築城者あるいは城主と言うのは適切ではない。しかしながら春綱が、毛利氏に対して、加賀浦をはじめ島根半島の十八ヶ所の浦々における帆役徴収権を求めて愁訴している^(付表-37)ところから考えると、港津や浦の支配と海城の関係にさらに光をあてる必要性が残されていると言えよう。

付 記

本稿をなすにあたっては、井上寛司氏を委員長とする松江市史編集委員会中世史部会によって収集された史料を利用させていただいた。また同部会において会員諸氏から貴重なご教示を得たが、とりわけ長谷川博史氏には懇篤なご助言を頂戴した。誌上をかりてともにあつく御礼を申し上げます。

なお、土塁と堀については別稿(「雲南市高瀬山城の構造について」雲南市教育委員会『高瀬山城跡消防救急デジタル無線整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2013年3月所収)に概要を示したので参照していただきたい。

- (注1)『雲陽誌』享保二年 黒沢長尚撰 秋鹿郡浜佐田のうちの七釜大明神の項
- (注2) 島根県学務部『島根県史 尼子毛利時代下』 昭和4年1月 も、松江市庁『松江市誌』 昭和16年10月も基本的にこれを踏襲している。筆者もまた、かつてこの定説にしたがって「出雲における毛利氏の山城について」『山陰史談』第22号1987年所収 で論じたことがあるが、あらためて検討し直したい。
- (注3) 長谷川博史「毛利氏の出雲国支配と富田城主」科研報告集『戦国期大名毛利氏の地域支配に関する研究』平成15年2月所収 長谷川氏の問題関心は、主として愁訴取次や諸役賦課等富田城主の権限の位置づけなどにあるが、湯原氏の出自や春綱の行動の詳細、湯原氏伝来文書の問題点などを精確に論じられている。
- (注4) 今後、特記しない限り、史料の出典は付表「満願寺城・加賀城・要害山城関係史料」の番号1を(付表-1)のように示す。
- (注5) 能島村上氏の能島城のように島全体を城郭化した城を海城とよぶべきとする主張(山内譲『海賊と海城』1997年)と、海に面した岬などに設けられた、海を活動の舞台とした領主の城を広く海城とよぶ見解(滝川恒昭「戦国期江戸湾における『海城』の存在形態」『千葉城郭研究』第3号1994年 所収)がある。また柴田龍司氏は、主郭群の直下あるいは際が海か川口に接し、海船が着岸可能な城と定義している。('海城の様相と変遷'『中世城郭研究』第22号2008年 所収)ここでは滝川氏の見解に沿って、所属の船舶の管理や海上の監視・制海権の確保などを目的として築城された城を海城とよぶこととする。
- (注6) 「吉川家旧記 四」『大日本史料10ノ3』では8月のこととし、(永禄十二年)七月二十日 小早川隆景書状写(『萩藩閥閥録』115湯原文左衛門3)では6月のこととしている。
- (注7) 永禄十三年五月十日 小早川隆景・吉川元春連署起請文(讃岐三木文書『大日本史料10ノ4』)
- (注8) (元亀元年)八月十四日 小早川隆景他三名連署書状写(『萩藩閥閥録』123野村作兵衛30)
- (注9) (元亀元年)八月十六日 毛利元就書状写(『萩藩閥閥録』107赤川次郎左衛門13) ここで元就は、「末次置兵糧百俵」を来る18日に杵築から平田へ送るので、杵築在陣衆と鳶巣番衆で警固に当たるよう命じている。また8月26日に元就は、「唯今末次之城普請申付」けて「城衆兵糧差籠」めたと伝えている。(元亀元年)八月二十六日 毛利元就書状写(『萩藩閥閥録』11浦図書15)
- (注10) (元亀元年)五月十六日 毛利元就書状(『大日本古文書 毛利家文書』572)
- (注11) 「(元亀元年)七月十六日 書状写(『萩藩閥閥録』153悪喜右衛門)では、井上就重の中間が鉄砲で打伏せたことを賞し、(元亀元年)十月十八日 毛利元就・同輝元蓮署書状写(『大日本古文書 吉川家文書』514)では、高瀬衆の夜襲を撃退したことを賞している などはその一例である。
- (注12) 安楽寿院古文書『平安遺文』2519
- (注13)『雲陽誌』島根郡浜佐田の項
- (注14)『出雲国風土記』秋鹿郡佐太川の条
- (注15) (元亀元年)五月十日 大野氏知行分書立(三木家文書『新編香川叢書』15) によると、おあし(大芦)三百貫、円福寺三百貫、岡本百貫と本領の秋鹿郡大野がその所領だった。
- (注16) (元亀元年)十月十七日 毛利元就書状写(『萩藩閥閥録』100児玉惣兵衛46)
- (注17) (元亀元年)十一月一日 毛利元就・同輝元蓮署書状写(『萩藩閥閥録』100児玉惣兵衛48) ここで毛利元就らは「幾度申聞候ても加賀浦勝利之段心地良仕合本望祝着候」と児玉就英を賞賛し、この勝利によって能義郡十神山城も落城したが、十神山城から退去した者が「本城(庄)したは(下葉)崎山」に立て籠もったので引き続き警戒するよう命じている。
- (注18)『萩藩閥閥録』55国司与一右衛門13 ここで輝元らは、高瀬城と真山城の麓で稲薙ぎを行って包囲網を狭めていることを伝えている。
- (注19)『雲陽軍実記』熊野城高佐城明渡并平田手崎城軍高瀬城兵糧之事の条
- (注20) 尼子家旧記「永禄九年十一月廿九日雲州富田下城迄相届衆中次第不同」『島根県史 尼子毛利時代下』所収
- (注21) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団『松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築(改良)工事に伴う大勝間山城跡発掘調査報告書』2009年1月
- (注22) 池平山城だけでなく講武平野と佐陀低地の諸城の詳細については拙稿「池平山城の構造について」松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団『池平山城跡 松江鹿島美保関線佐陀本郷工区改築(改良)工事に伴う発掘調査報告書』2009年10月所収 を参照されたい。
- (注23) 出雲小野家文書『南北朝遺文 中国・四国編』1871
- (注24)『雲陽軍実記』雲州佐陀末次合戦興久敗亡、并備後山内へ被落事の条 『陰徳太平記』雲州佐陀城没落事の条 にも記事があるが具体性に欠ける。なお塩冶興久の「謀叛」に関しては、享禄3年以来の尼子氏と塩冶氏の長期にわたる武力衝突で、塩冶氏の歴史的な性格から杵築大社両国造家や鰐淵寺等の宗教勢力、三沢氏や多賀氏などの有力国人らも巻き込んだ全面戦争との評価がなされている。長谷川博史「戦

国期大名権力の形成－尼子氏による出雲奉公衆塩冶氏の掌握と討滅－』『戦国大名尼子氏の研究』2000年5月所収

- (注25) 八束郡自治協会『八束郡誌』大正15年 生馬村の条、『日本城郭大系 14』「島根県 その他の城郭一覧」の殿山城の項 もこれを踏襲している。
- (注26) 『日本歴史地名大系 島根県の地名』1995年7月 満願寺城の項
- (注27) これ以前の、(元亀元年)二月七日 毛利元就書状写(『萩藩閥閥録』115湯原文左衛門13)の補注に「満願寺之城」とあるが、戦況の推移からみて疑わしいところがある。また、その家譜には、湯原信綱が大永七年(1527)に満願寺城を築いたとあるがこれも同様である。総じて『萩藩閥閥録』の湯原文左衛門家にはなお検討を要する文書が含まれている。
- (注28) (元亀元年)十一月二日 毛利元就・同輝元輝元書状写(付表一9)では、「隠州船退かね候て、本庄・下葉崎に一城 構罷居之由候」とあり、これ以前に十神山城などから落ちのびた尼子方が中海の北西岸に展開していたことが知られる。ただ、下葉崎がどこを指しているかは判然としない。
- (注29) 寺井毅「出雲・隠岐地方の中近世城館跡の分布とその特徴について」『出雲・隠岐』所収 この他に同報告書に「横堀」の記載があるのは、新宮谷城館跡(安来市広瀬町富田)、土居城跡(松江市上大野町)、伝揖東氏館跡(松江市東出雲町下意東)、城の内館跡(松江市宍道町上来待)、布広城跡(奥出雲町三沢)、高尾城跡(奥出雲町高尾)、沢城跡(雲南市頓原町佐見)である。
- (注30) 『島根町誌 資料編』昭和56年3月 「地名 加賀浜部分図」による
- (注31) これらの通称地名に挟まれるように「殿様蔵」「御番所屋敷」があるが、これは松江藩が年貢米を大坂蔵屋敷に向けて運送する際に加賀港がその積み出し港とされたことを物語っており、後世の命名である。
- (注32) 『日本歴史地名大系 島根県の地名』1995年7月 加賀庄の項

付表 満願寺城・加賀城・要害山城関係史料

築城と修補及びそれを必要としたと思われる周辺での戦闘にかかる史料を抜粋した

番号	年 月 日	西暦	文 書 名	宛 名	内 容	出 典	典 拠
1	(元亀元) 5. 25	1570	小早川隆景書状	野村士悦	…羽倉之儀、何と様にも堅固之儀專一候、佐陀江の一廉人数被差出候間、新山衆羽倉責ハ難成候、此方鉄炮衆はや可為着候之条…	野村家文書	出雲尼子史料集 1611
2	(元亀元) 6. 8	1570	吉川元春書状写	堀立直正	…一 羽倉山之儀も從此方仕取相抱候、佐陀之事從此方一城取付相抱候、然処去三日從新山相動、終日相責候、…剩敵數十人討取候、其内こも三刀屋蔵人…上田早苗助…	堀立家証文写	出雲尼子史料集 1624
3	(元亀元) 8. 19	1570	小早川隆景書状写	栗谷元種	井上源右衛門尉事佐陀江早ゝ被遣之、此節是非共こ圓福寺之儀、苅田仕候様調儀させられ候て可然候…	萩閼38井上彦左衛門29	萩藩閼閩録第二卷
4	(元亀元) 10. 19	1570	毛利元就書状写	児玉就英	去十六日至加ゝ浦、船乗廻之由申越候、具承知候、…其方事船数幾無之候ゝ頓罷上候事、短足之段無比類候、…	萩閼100児玉惣兵衛34	萩藩閼閩録第三卷
5	(元亀元) 10. 19	1570	毛利輝元書状写	児玉就英	其方事、去十六日自宇龍至加賀浦乗廻之由、注進之通承知候、於于今可為森山着候、…	萩閼100児玉惣兵衛37	萩藩閼閩録第三卷
6	(元亀元) 10. 25	1570	毛利元就・同輝元連署書状写	名井豊前守他五名	…雲州満願寺山之儀、敵取誘付ゝ神西在陣衆罷出、可仕崩之覚悟候、就其人数之儀追ゝ申越候…	萩閼124平賀九郎兵衛58	萩藩閼閩録第三卷
7	(元亀元) 10. 28	1570	毛利元就・同輝元連署書状写	児玉就英	去廿四日至加賀浦盪廻、敵舟数艘切捕、剩兵糧以下過分焼捨之由、寔肝要大慶候…	萩閼100児玉惣兵衛32	萩藩閼閩録第三卷
8	(元亀元) 11. 1	1570	毛利元就・同輝元連署書状写	児玉就英	…其方事至森山去月廿五日着岸之由、尤可然候、幾度申聞候ても於加賀浦勝利之段、心地能仕合本望祝着候…	萩閼100児玉惣兵衛48	萩藩閼閩録第三卷
9	(元亀元) 11. 2	1570	毛利元就・同輝元連署書状写	児玉就英	…秋 庵(秋上久家)申談急度一途申付可然候、彼城於一着者、満願寺山之儀幾即可為落去候…	萩閼100児玉惣兵衛33	萩藩閼閩録第三卷
10	(元亀元) 11. 4	1570	毛利元就・同輝元連署書状写	児玉就英	…於加賀浦得勝利、剩早速森山盪入成相候事、誠無比類之動感悦之至候、…	萩閼100児玉惣兵衛29	萩藩閼閩録第三卷
11	(元亀元) 11. 20	1570	毛利元就・同輝元連署書状写	口羽通良	敵舟庄原こかけ置候所を、岡又十郎退衆を同道仕、罷出候て彼舟番之者共悉追払、…満願寺之事も頓可為太利候、追ゝ期吉事候、…	萩閼80岡吉左衛門33	萩藩閼閩録第二卷
12	(元亀元) 11. 22	1570	吉川元春他二名連署書状写	児玉就英他三名	…一 満願寺表行之事、富田衆着陣之段相待候、定め今明之間、至日吉・大庭可被打出存候、爰元渡海候ゝ、至満願寺可相動候ゝ、…満願寺行一大事之儀候間、内海江之警固早ゝ可被差越事肝要迄候、…	萩閼100児玉惣兵衛59	萩藩閼閩録第三卷
13	(元亀元) 11. 23	1570	吉川元春・口羽通良連署書状写	湯原春綱	…佐陀江之敵舟湯原以調儀取候、…	萩閼115湯原文左衛門11	萩藩閼閩録第三卷
14	(元亀元) 11. 29	1570	毛利元就・輝元連署書状写	湯原春綱	去廿二日之夜各申談、満願寺江之内こ候船三艘忍執之由候、誠肝要候、…	萩閼115湯原文左衛門16	萩藩閼閩録第三卷
15	(元亀元) 12. 4	1570	毛利元就書状写	児玉就英	満願寺動之實否相澄候ゝ、其方事年内可罷下候、春ハ則又可差出候、…	萩閼100児玉惣兵衛50	萩藩閼閩録第三卷
16	(元亀元) 12. 12	1570	毛利輝元書状写	末国元光	其表長ゝ在番辛勞候、仍満願寺・下葉崎落去候、太慶候、新山・高瀬之事調略半候間、急度可為一着候…	萩閼128末国与左衛門17	萩藩閼閩録第三卷
17	(元亀元) 12. 18	1570	毛利元就書状写	湯原春綱	…仍其表之儀末次被成御在番候、然処満願寺取誘付ゝ御番之儀各申候哉、被得其心之由承候、…	萩閼115湯原文左衛門100	萩藩閼閩録第三卷
18	(元亀元) 12. 20	1570	口羽通良書状写	湯浅将宗	…満願寺・下葉崎落去之砌、無御在陣口惜思召之由候、	萩閼104湯浅権兵衛90	萩藩閼閩録第三卷
19	(元亀二) 2. 3	1571	吉川元春書状写	湯原春綱	…新山より至其城(満願寺城)可相動申候哉、無油断御用心肝要候、仍山下普請可申付之由得其心候、…尾首之堀御堀(掘)せ之由先以可然候…	萩閼115湯原文左衛門110	萩藩閼閩録第三卷
20	(元亀二) 2. 13	1571	毛利輝元書状写	湯原春綱	…賀ゝ小城取誘候、然ゝ賊船可罷下時分候間、普請可相調間、為彼城番衆御出可為祝着候、…	萩閼115湯原文左衛門113	萩藩閼閩録第三卷

21	(元龜二)3.3	1571	毛利元秋書状写	湯原春綱	…一 加賀城普請相損之由候、殊更番衆等無之由笑止存候…	萩閤115湯原文左衛門12	萩藩閤閱録第三卷
22	(元龜二)3.23	1571	吉川元春書状写	桂就宣・児玉元良	湯原右京進(春綱)加賀御番之儀并申分等之儀、以御気色そと御披露肝要候、…	萩閤115湯原文左衛門114	萩藩閤閱録第三卷
23	(元龜二)4.3	1571	小早川隆景書状写	湯原春綱	…去年以来末次并当城打続御在番、御辛勞之至申茂疎候…	萩閤115湯原文左衛門8	萩藩閤閱録第三卷
24	(元龜二)4.23	1571	宍道隆慶書状写	湯原春綱	先日者賊船之儀付り示預畏入候、…當時加賀城御番之由御辛勞候…	萩閤115湯原文左衛門119	萩藩閤閱録第三卷
25	(元龜二)5.9	1571	毛利元秋・南方就昌・天野隆重連署書状写	湯原元綱	…次但馬賊船少ゝ可盪下風聞有之候由、…吳ゝ從最前御在番一廉御辛勞候、…	萩閤115湯原文左衛門116	萩藩閤閱録第三卷
26	(元龜二)5.19	1571	毛利元秋書状写	湯原春綱	…誠こ長ゝ御在番辛勞之至候、…	萩閤115湯原文左衛門121	萩藩閤閱録第三卷
27	(元龜二)5.21	1571	毛利輝元書状写	湯原春綱	…加賀城普請同(道)具之儀被申越候、得其心候、急度可申付候、…	萩閤115湯原文左衛門19	萩藩閤閱録第三卷
28	(元龜二)5.21	1571	毛利元秋書状写	湯原春綱	…誠平次(元綱)殿御事加賀御在番御辛勞無申計候、殊更一入御馳走之段無比類候、…	萩閤115湯原文左衛門9	萩藩閤閱録第三卷
29	(元龜二)5.25	1571	毛利元秋書状写	湯原春綱	…何ヶ度申候て茂、加賀御在番諸事無御油断被仰付之由、誠御馳走無申計候、…	萩閤115湯原文左衛門111	萩藩閤閱録第三卷
30	(元龜二)6.5	1571	毛利元秋書状写	湯原春綱	…来廿日二ハ元春此表ハ被成御陣易候、可御心安候、満願寺之儀八境目事と申、日夜御氣遣之段難申尽候、…	萩閤115湯原文左衛門6	萩藩閤閱録第三卷
31	(元龜二)7.4	1571	小早川隆景書状写	湯原春綱	元就遠行付り、香銭百疋送給候、…某許満願寺御在番付り御辛勞察申候、…	萩閤115湯原文左衛門115	萩藩閤閱録第三卷
32	(元龜三)5.12	1572	吉川元春書状写	富田元秋・天野隆重	…今日吉田罷出候間委細可申聞候、加賀要害普請、諸事趣之儀委細得其心候、是又可申候、新山城誘之事於吉田令内談、從是可申入候、…	萩閤115湯原文左衛門117	萩藩閤閱録第三卷
33	(元龜三)5.21	1572	天野隆重書状写	湯原春綱・同元綱	…御方御親子加賀御番之儀別り被成御馳走、無二之御心懸之通、元秋申談芸州ハ以使者令申候處、…加賀要害繩結替切岸之事、近辺之村ハ上意こ候間、元秋申談仕配仕候、五六日之間こ調可申候、…	萩閤115湯原文左衛門124	萩藩閤閱録第三卷
34	(元龜四)3.12	1573	天野隆重書状写	桂就宣・児玉元良	湯原右京進(春綱)參上候、去ゝ年之春以来加賀御要害御番被遂其節候、…末次被仰付致御番馳走候、將又加賀御城番、弥可遂其節上意こ候者、屏隔子曾り無之候之条、御普請被仰付可被下之由候、…	萩閤115湯原文左衛門123	萩藩閤閱録第三卷
35	(元龜四)5.1	1573	福原貞俊書状写	富田元秋・天野隆重	…仍湯原右京進(春綱)加賀要害在番等無緩馳走之由尤可然肝要之御事候、…加賀要害之儀彌湯 右(湯原春綱)乍辛勞、如今駢可有在番事簡要之由候、然間置兵糧玉葉百矢以下可被申付之由候哉、令披露候、…	萩閤115湯原文左衛門26	萩藩閤閱録第三卷
36	(元龜四)5.4	1573	小早川隆景書状写	富田元秋・天野隆重	…一 湯原右京進(春綱)申分等之儀、尤馳走之儀候、置兵糧玉葉百矢之事、從吉田可被仰付候、自船中見へ候条、普請之事是又尤候、急度一人被差上候様こ可申候…	萩閤115湯原文左衛門25	萩藩閤閱録第三卷
37	(天正二)3.19	1574	湯原春綱帆役覚書写	桂就宣・児玉元良	…一 佐陀浦 四ヶ所…一 加賀浦ニヶ所… 右帆役事、船往返雖稀ゝ之儀候、被下置候者可忝候、…	萩閤115湯原文左衛門128	萩藩閤閱録第三卷
38	年月日未詳		森脇覚書		…一、雲州赤穴へ悉被成御出張候、…五年御座候て、被御除明、其後、島根満願寺に御在陳候、…一、高瀬兵糧断絶こ付り、新山より満願寺の城を取付、佐田の江より舟を出し、歴々之人数を以、船中無何事、高瀬へ兵糧入申候…	中国史料集	出雲尼子史料集1939
39	年月日未詳		渡辺助允覚書		…一、雲州佐陀と申所こ、毛利方人数差集之時、鹿介相動、及一戰候時、頸一ツ討取申事…一、同国之内、満願寺と申城こ毛利勢相籠時、敵方之様子可聞届ためとて、生捕可仕之旨、味方中へ被申出候節、則生捕一人仕事、…	島根県立図書館蔵文書	出雲尼子史料集1927